

古代の備前国分寺周辺(想像図)

備前国分尼寺(推定)

備前国分寺跡は1974(昭和49)年、岡山県による発掘調査によってその伽藍が確認され、翌年に国の史跡に指定されました。2003(平成15)年度からは、赤磐市による発掘調査と整備が行われてきました。本書では、これらの調査によって明らかになった主要な堂塔の配置や規模、遺物などを中心に紹介していきます。

## 国分寺が建立された時代

国分寺は今から1300年ほど前の741(天平13)年、聖武天皇の国分寺建立の詔により、全国60余国の国ごとに建てられた寺院です。

この頃、朝廷では貴族の対立が激しくなっていました。また一方、民衆は災害や疫病の流行に苦しい思いをしていました。そのため、国分寺を建立することで、このような危機を仏教の力で鎮め護ろうとしたのです。

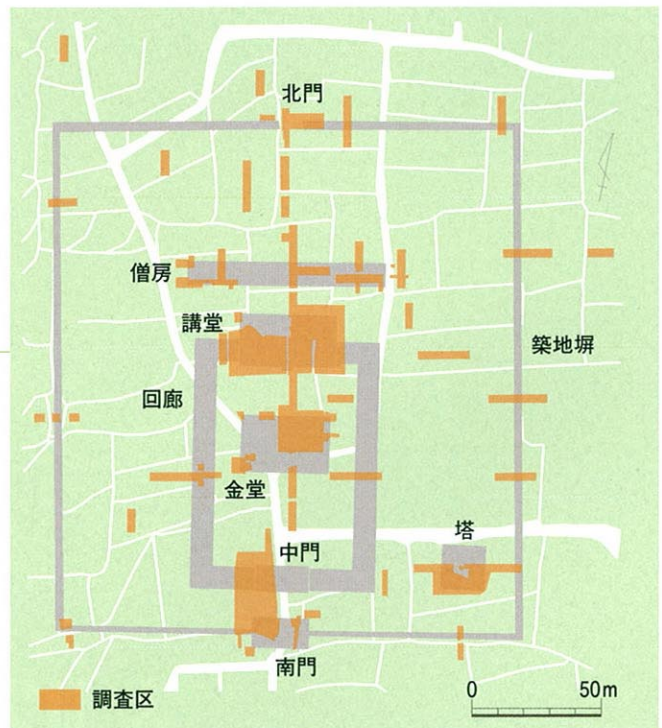
備前国では、現在の赤磐市馬屋に備前国分寺が建立されることになりました。国分寺の南側には東西に延びる古代山陽道を挟んで備前国分尼寺も建立されたと考えられています。

## 伽藍配置

備前国分寺跡の伽藍配置は国分寺式伽藍配置と呼ばれる配置です。

東西約175m、南北約190mの築地堀に囲まれた境内には、南門・中門・金堂・講堂・僧房という主要な建物が南北に一直線に並び、境内の南東に塔が配置されていました。

回廊は金堂を囲うように中門と講堂とをつないでいました。



伽藍配置と調査区の位置